

# わが著書を語る

## 『邪馬台国への路を推理する - 魏使は洞海湾に上陸し別府を目指した -』

酒井正士  
(会員 No.10299)

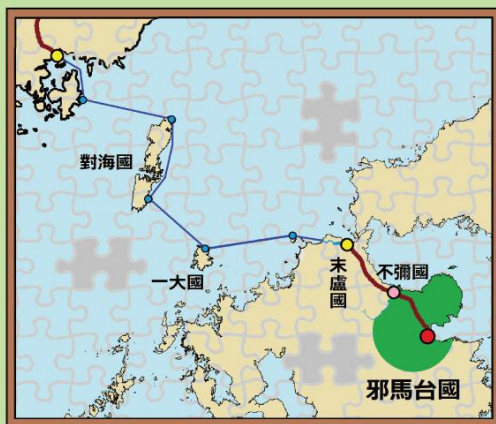
魏志倭人伝中の距離と方向に関する記述をできるだけ忠実に扱うことを念頭に、下記的前提のもと、邪馬台国の所在地について考えてみました。

- ① 魏志倭人伝中の「距離と方向」は主に魏使派遣に先立つ測量に基づくもので精度は高い。
- ② 狗邪韓国出航から末盧國上陸までに登場する「千餘里」は直線距離を意味する。
- ③ 古代中国の天文数学書・周髀算經の記述に基づき「一里 = 77メートル」とする。

その結果、魏の使者の上陸地・末盧國は洞海湾東南岸（北九州市枝光付近）、末盧國から東南 500 里の伊都國は福岡県築上町湊付近と考えられました。ここは秦王国の中心地とも言われるかつての綾幡郷であり、帯方郡の使者が往来し駐留する場所として相応しいところです。そして、伊都國から東南に 100 里進んだ豊前市が奴國、そこから東に 100 里進んで福岡・大分県境の山国川を渡った中津市が不彌國と考えられます。

### 邪馬台国への路を推理する

- 魏使は洞海湾に上陸し別府を目指した -



酒井正士

中津市で道は分岐し、右に進むと高千穂町を経て日向灘に、真っ直ぐ進むと宇佐市を経て別府市に到ります。私の考えでは、投馬國は日向灘沿岸、邪馬台國は宇佐市や国東半島を含む大分県北部であり、邪馬台國の都は別府市の扇状地に在ったと考えました。別府ならば、東側に海が面していることに加えて、丹（水銀）の鉱山跡もあり、魏志倭人伝の記述と辻褃が合います。

「水行十日 陸行一月」を帯方郡からの旅行日数とする考えは高木彬光氏や古田武彦氏の説を踏襲しましたが、朝鮮半島内も含めて旅程を検証した結果、大きな矛盾がないことを確認できました。

邪馬台國の都を別府市とした場合、吉野ヶ里のような大規模遺跡が発見されていないことが気になりますが、別府市西方の鶴見岳は貞観 9 年（867 年）に大噴火を起こしていて、扇状地の奥側は火山灰に覆われてしまい、遺跡が埋もれてしまった可能性も考えられます。

発行：ブイツーソリューション；540 円（税込）  
Kindle 版 270 円（税込）